

# 劇的な 九回裏の反撃

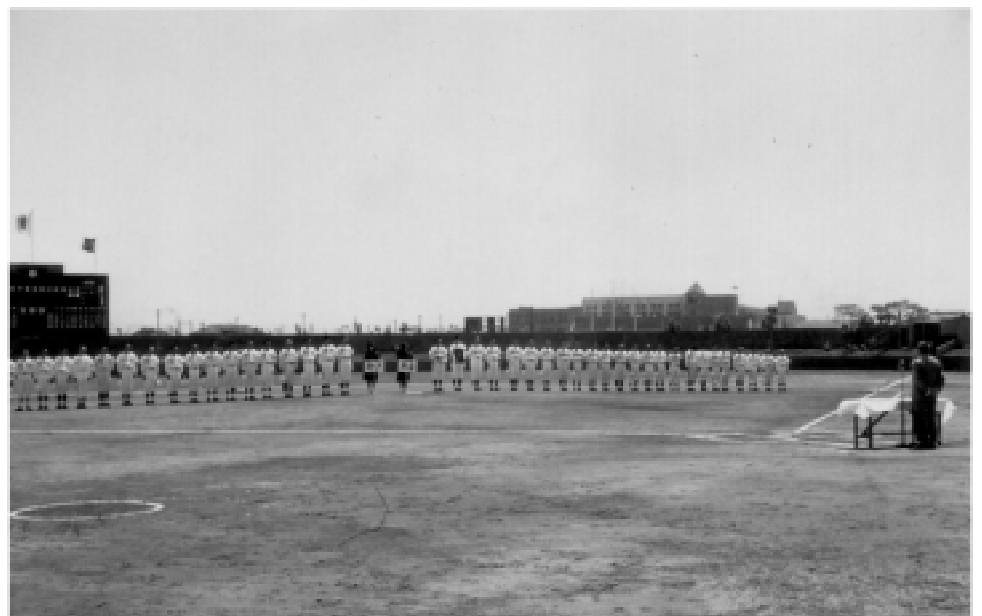


長田区長田郡区内  
寺地町一丁目  
兵庫県立兵庫高等学校  
新聞委員会  
電話③2526・6262  
印刷所 啓文社印刷株式  
電話神戸①(代表)8658

## あやうし兵高

### 桑原殊勳の右前打

五月二十一日、神戸市民球場で伝統の「神戸高―兵庫高」の野球定期戦が行われた。前年の雪辱を目指す神戸、「今年も」の意気高い兵庫、両校注視のうち定刻一時、神戸高松永君の指揮するプラスバンドの演奏が、五月晴れの空に響き渡り、開会式が行われたあと、高山神戸高校長の始球式で試合が始められ熱戦の末、兵庫高が九回裏の猛反撃が効を奏し、二―一で勝利を飾った。



# 試合評

例年の優勝にくらべて、今年は非常な苦戦をし、九回の猛反撃でやっと神戸高を降したが、さして強敵と思われない神戸に対して、ここまで苦戦をした原因は一体何だろうか。

まず第一に考えられることは、打撃の不振である。

当日の神戸高宮地投手は、徹底した外角攻めと、角度の鋭いカーブ、打者の手前でホップするシュートと、いいピッチングをしてはいたが、けっして打てないピッチャーではなかった。

とくに、外角の直球は、コントロールこそあったが、うびがなく九回桑原がやったあのライト打ちをもっと早くからみせていれば、これほど直打の結果には終らなかったであろう。

力のあるバッターがなく、小粒ぞろいの兵隊としては、どんな球にもくいついて行く闘志と、足とでかきまわさなくてはとどいて、塁下制覇は出来ないだろう。

また、もう一つの原因は投手陣に決め手がないうことである。

エース桐本は、フォームが全然さだまらず、また下半身の弱さもあって、コントロールがなく、昨年みせた大きく落ちるドロップも

見られず惨たんたるものである。あれだけの長身だから、萎縮せず思いきった投球をしてほしいものだ。

体重をのせて、サウスボー独特のクロス・ファイヤーがひき元に決まり出せば、塁下有数の投手になろう。

また、最初投げた中村は、外角で小さく曲るカーブにみるべきものはあったが、やはり投手としては、力不足、そのうまいバッティングと早い足を生かして、打撃に専念すべきだ。

わずかな望みはアンダースローからクセのある球を投げる伊之坂だ。以上欠点はかりあつめたが、

トップ桑原のうまいバッティング、丹羽、長谷川の長身組など、得來をたのしみますに充分な要素があるが、ただ、たびたびのむちゃな盗塁があったように、慎重に攻めること、とくに、ベンチのサインを徹底させなくては、だめなのではないか。

## 殊勳の桑原君に

### 一問一答

九回殊勳のライト前ヒットを打った桑原君に一問一答を試みた。

—よかったねえ

「有難うございます」「と思をはすませる。」

# 応援

## 定期戦の反省

### 役員会

定期戦における応援の時ほど、全校生の統一と協力が如何ほどであるかと判断できる時はまずない。そしてこの結果が立派なものであればとりもなおさず、各方面においてそれ相当の進展が期待できる。この意味において、私たちは応援を重視している。

今年の秋あるいは来年の為に先月の応援の欠点を反省してみる第一に応援団員が少ないこと。しかも中堅二军在、定期戦前に参加してくれた一人、一年生四名、三年生一名という寂しさ。この為にスタンドの応援練習も、間があき円滑に行かなかった。少なくとも団員は十数名必要だ。第二に団員

が少なくなって、伝統の囀子の振り方などが壊れて、種目が少なくなったこと、二時間もあつたから、もっと沢山の種目が必要だ。

この問題は、今後の応援団に残された大きな課題である。他に拾ってみると、拍手の練習は不足していたし、球場における連絡もまずかった。全校生に対しては、一部協力してくれなかった人がいたのは残念だった。応援団というのは常設的存在でないから、ほとんど団員の負担はない。全校生を指導し得る立場は面白いことも確かである。今後もっと沢山の人が入団してもらいたい。

ただ私達としては、定期戦はもっと賑やかな所（その為に大獅子を二つ作ったのだが、強風の為使用できなかったのは残念であつた）があつてもよいと思う。

直接に指導してくれた応援団長松本健一君に感謝するものである。今後の応援は、より進歩したものにしたいものだ。



## 試合の経過

まず一回の表裏は両校共にチャンスをつかみながら無得点におわった。特に本校の攻撃はノーアウトでヒットが出、さらに相手捕手のバースポールで二進し、スリーバントは失敗したがショートゴロで三進、なおも四球で一、三塁とし先取点をあげるかに思えたが次打者は相手投手の力投に一壘フライ

とおさえられた。二回以後の神戸高校は試合前の予想にまったく反して本校の投手をよく攻めたが、要所要所をしめられて得点できなかった。しかしついに七回ツーアウト後一本の連続二塁打で一点をあげた。本校は、神戸よりも試合をおしきみに進めていながらこの七回に与えた一点に最後まで苦しめられた。そして一対〇とリードされたまま、九回をむかえ、今年

の定期戦は神戸がこのままにけ切るかに思えた。しかし、本校はこのどたん場にワンナウト後国本君がサードゴロエラーで一壘に出、次打者は主将の上田君で期待にたがわず三遊間ヒットを放ち山下君のピッチャーゴロで二封されたが牧之内君がこの試合二本目の安打を打つと、この球をレフトが走者は三塁にとまっているのに本塁に悪返球して同点となり、さらに桑原君がライト前に安打して勝越しの走者山下君が生還、本校の優勝となった。

